

会員の広場



いごも食堂

安間 孝信（東京）

その存在を知ったのは二年程前の国谷裕子さんがキャスターを務めるNHK「クローズアップ現代」を見た時だった。毎日の食事にこと欠く子供がいて給食の無い夏休み等は瘦せてしまっているというレポートだった。

過去に「一杯の掛け蕎麦」が話題になった

ことが有ったが、それどころではない貧しさだ。しかも貧困で食事がとれない子供は増加しているというものだった。

衝撃を受けて番組を見終わった私はすぐにネットを開き、そのいごも食堂を探した。池袋の隣にある「Aいごも食堂」で有る事がすぐに分かった。

私には仙台近郊に息子が居て時々宮城県産米を送ってくれる。しかし、家内と二人では食べきれずに残ってしまう。それをここで使ってもらおうと思ひ、食べ物だけにちゃんと挨拶をした方が安心だろうと代表のYさんに会いに行った。

笑顔で迎えてくれたYさんは、いごも食堂を始めたきっかけなど色々な事を話してくれ

た。Yさんはサラリーマンであったが、パン屋を営んでいた奥様を何年前かに亡くされた

そうである。その奥様はパンを多めに焼き、残ったパンを池袋のホームレスの人に配っていて、「自分が死んだらこのことを続けてほしい」と言っていたそうである。

Yさんが初めてパンを焼いたときはめっちゃくちゃだったそうだが、悪戦苦闘し、何とか普通に焼けるようになって、奥様との約束を果たせた。

この事を通じて食事を摂れていない子供がなんと六人に一人も居る事に気が付き、ボランティアの人達といごも食堂を始めた。

ここでは食事を提供するにあたり子供たちが何か手伝ってもらおうのが決まりだ。部屋の

掃除や配膳、後片付けをする等である。

ここに来るのはほとんどがシングルマザーの小学校中学校の子供達だそうだ。子供達はお互いが貧困という境遇に共通点を見出し、しばらくするとすぐに仲良くなるそうだ。

「子供がいる現役世帯のうち大人が一人の世帯では相対的貧困率は50・8%でOECD加盟国三四カ国中最も高い」（東洋経済オンライン）。

いごも食堂の運営は食材を提供してくれる個人や企業と調理を手伝うボランティアの人々、それにYさんの私財をなげうった献身的考えが支えている。

この事を知った以上、社会派を自認する私は放って置けなく、微力ながら手伝っている。